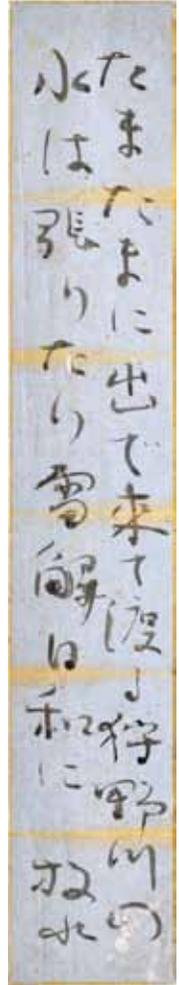


沼津市若山牧水記念館

第64号 令和2年3月1日 編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



たまたまに出でて来て渡る狩野川の水は張りたり雪解日和に

牧水

金粉のほどこされた短冊に丁寧にかかれた短歌は、「雪解川」と題して大正十年の春に詠まれた三首中の一首で、第十四歌集『山桜の歌』に収められている。

初出は、『創作』大正十年二、三月合併号で、わが宿の近きながるる狩野川の水は張りたり雪解日和に

となつている。ほかの二首は次のとおりである。

仮橋をわたれば寒き風吹くや雪解の川の水みなぎりて
橋銭をはらひてわたる仮橋の板あやふくて寒き春風

牧水は、大正九年八月十五日に東京を離れて、楊原村上香貫の借家に一家をあげて移住して来た。楊原村は、沼津町の街中を流れている狩野川の左岸（東側）に位置しており、沼津町の中心は狩野川右岸（西側）であった。したがって、牧水が沼津駅や沼津の街へ行くためには、狩野川を渡る必要があった。狩野川には、上流（北）から、明治十四年に架けられた「黒瀬橋」、明治九年に架けられた「港橋（湊橋）」（明治天皇が御用邸へ行くために渡られたことから明治四十一年に「御成橋」と改名）、明治十五年に架けられ

た「入船橋」（明治三十三年に「永代橋」と改名）の三つの橋があった。当時、橋を架けるために出資を募り、橋を渡る人から「橋銭」を徴収して出資者に返済するというのがあった。御成橋は明治三十二年に無料になったが、黒瀬橋と永代橋が無料になったのは、沼津町と楊原村が合併して沼津市となった大正十二年で、「雪解川」三首が詠まれた大正十年は、黒瀬橋と永代橋は未だ仮橋であり、橋を渡るときには橋銭を払う必要があった。牧水の借家のあった場所を考えると、牧水がこのとき渡った橋は黒瀬橋だったのだろうと思われる。

ところで、「狩野川」は、伊豆半島の天城山に端を発して北上し、沼津で南下して駿河湾に流れる一級河川である。支流には、名水百選に選定されている「柿田川湧水」で知られる「柿田川」、御殿場に端を発して南下する川で、源頼朝と義経兄弟の対面の場としてその名を知られている「黄瀬川」、芦ノ湖の西側に源を発し、三島を北から南に流れている「大場川」などがある。

なお、「狩野川」の名が全国に広く知られたのは、昭和三十三年九月に伊豆半島や沼津のほか、東京をはじめ関東地方に大きな被害を与えた「狩野川台風」によってである。昨年十月、東日本各地に大被害をもたらした台風十九号が接近したとき、「狩野川台風に匹敵する」と報道され、狩野川の名が再び全国に知られることになってしまったが、狩野川は、鰻の採れる川としても親しまれ、河畔に鰻家などの料亭が建ち並んだ川であり、現在も街の中心を流れる川として、沼津の人々にとって欠かせぬ大切な川である。

言葉の不思議

穂村 弘

● 言葉の不思議

言葉の不思議さについて考えてみたいと思います。私たちにとって言葉は身近なものです。普段は意識することなく口に出したり、文章を書いたりしています。ところが、何かの拍子に言葉というものを強く意識する瞬間があります。私は四十二歳の時に結婚したのですが、その相手のことを第三者に対してどのように表現するべきなのか、迷ったことを覚えています。

妻、女房、奥さん、嫁、家内、家人、パートナー、つれあい、細君、相方、ワイフ、うちのやつ、配偶者、山の神、大蔵省、敵……。

多くの候補がありながら、これというものがみつからないことが不思議でした。「女房」とか「つれあい」と呼ぶには私の貫禄が足りない。「奥さん、嫁、家内」のように相手に家に結びつける表現は現在のジェンダー感覚

に照らして問題があるだろう。かといって、「パートナー」はなんだか気恥ずかしい。どれを選ぶにしても、それを口に出した瞬間に、自分の内なる世界像が外界に明示されてしまうような緊張感を覚えたのです。結局、「妻」と呼んでいるのですが、確信があるわけではなく、その瞬間は妙に早口で自信無さげな口調になってしまいます。

このような体験から、普段は何気なく使っている言葉も、それを発する人の内面や属性を外界に対して示すものであることがわかりました。例えば、自分のことを「小生」と呼ぶ人には、特有の賢くて気難しそうなイメージがあります。また、「がんばってネ」のように語尾だけをカタカナにするのは或る世代に特に目立つ現象です。他にも、「でも、さつきそうおつしやったじゃねえか!」と会社で叫んでしまった新人社員の話を聞いたことがあります。詳しい背景を聞くまでもなく、このワンフレーズだけからでも、その人の置かれた状況や気持ちの手取るようにわかる気がします。

その一方で、言葉は固定的なツールではなく、周囲との結びつきの中で変化してゆくものでもあると思います。特急電車の名前を例に考えてみましょう。

「つばめ」↓「こだま」↓「ひかり」↓
「のぞみ」

戦前の特急に「つばめ」がありました。よくわかるネーミングです。「つばめ」という鳥は速くてかっこよくて親しみやすい。その名づけに誰もが納得したことでしょう。逆に特急「にわとり」とか特急「かめ」ということは考えられないと思います。

ところが、戦後になって特急を超える超特急というものが生まれました。新幹線です。その名は「こだま」、さらには「ひかり」。それぞれ音速と光速ですから、「つばめ」がどんなに速くても敵いません。凄いなーミングです。でも、と私は考えてしまうんです。「ひかり」と名づけた人誰かはわかりませんが「は、ちらつと不安に思わなかったんでしようか。この先もつと速い電車が出現したらどうしよう、と。その時、どんな名前をつけたいのか。だって「ひかり」より速いものはこの世にないんだから。と思っていたら、案の定、より速い新幹線が登場しました。そし

て、発表されたネーミングは「のぞみ」。なるほどなあ、と感心しました。「のぞみ」つまり人間の思いは「ひかり」よりも速い。でも、この先はどうなるんだろう。もしかして「いのり」とか？　なんだか天国に行つてしまふそうだけど……。

「つばめ」↓「こだま」↓「ひかり」↓「のぞみ」というネーミングの流れを見ていて、気づいたことがあります。それは実体からイメージへと変化していることです。「つばめ」は実在の生物。「こだま」や「ひかり」は実体はないけれど耳で聞いたり目で感じることはできる。そして、「のぞみ」はそれすらもできない純粹な概念です。

実体からイメージへという変化については、他にも思い当たる例があります。それは東京の電波塔です。

「東京タワー」↓「スカイツリー」

「東京タワー」という名前は実体的です。「東京」にある「タワー」だから「東京タワー」。一方、その後に出現した「スカイツリー」はどうでしょう。「スカイ」の「ツリー」、つまり「空の樹」ということになります。これは実体ではなく、一種の比喩ですね。現実というよりも神話とか民話とか童話に出てきそ

うなネーミングだと思っています。実体からイメージへ、時代が下るにつれて言葉が変化してゆくのは何故でしょう。その原因の一つは社会システムとの関係性にあると思います。

「飲みましょう」↓「スカッとさわやか
コカ・コーラ」↓「アイ・フィール・
コーク」↓「ココロが求めている」

これは日本におけるコカコーラのキャッチコピーの変化を示したものです。「飲みましょう」はきわめて実体的。でも、続く「スカッとさわやかコカ・コーラ」は単に飲み物としての「さわやか」を超えたイメージ化が見られます。「アイ・フィール・コーク」も同様で、実体に即して云うなら「アイ・ドリンク・コーク」になるはずでしょう。この流れの上で決定的なのは「ココロが求めている」で、実レベルでは「カラダが求めている」になると思います。でも、資本主義が進展した社会におけるキャッチコピーとしては、それでは不十分なのです。喉が渴いたから飲むという、実体的な「カラダ」の必要性からの売上には限界があります。一方、「ココロ」の求める量には限界がありません。お金を軸とした社会システムの中で、言葉が実体からイメージへと移り変わってゆくのはこのためだと思われ

ます。典型的なのは洋服や靴などの商品です。現在八十代の私の父にとって洋服は防寒具で靴は実用品、つまり完全に実体的な存在です。「カラダ」が求めた時しか購入することはない。でも、私は違います。限定色とか有名デザイナーとのコラボとか、うまくアピールされると、既に持っているものでも、つい買ってしまう。それは「ココロが求めている」からです。メーカーの側からすると、父よりも私のような客の方がありがたく、なるべく、そのような存在を増やしたい。まだ着られるコートをシーズン毎に買い替え、履ききれないほどの靴を揃えて欲しい。そのために社会の言葉は「カラダ」よりも「ココロ」に、つまり実体よりもイメージに訴える必要があるのです。

● 社会と短歌

社会のモードの移り変わりに従って言葉の位相が変化します。この影響は千年以上の歴史をもつ短歌の場合も例外ではありません。

どこの子か知らぬ少女を肩に乗せ雪のはじめのひとひらを待つ
萩原裕幸

今から三十年前に当時の若者が作った歌で

す。同世代の私は抒情的な秀歌としてこれを読みました。ところが、現代の若者にこの歌を示すと、あ、やばい人の歌ですね、という反応が返ってきて驚きます。「どこの子か知らぬ少女を肩に乗せ」の時点でNGというか、作中の（私）の行動に危うさを感じるというわけです。もちろん作品そのものは作られた時から一文字も変化していません。三十年の時間の流れの中で変わったのは、読者側の社会規範の方ということになります。

あまりにも急速な社会の変化に我々自身が馴染めない局面も出てきます。その違和感を詠った歌を挙げてみましょう。

骨なしのチキンに骨が残っててそれを混入事象と呼ぶ日 岡野大嗣

「骨なしのチキン」という生物はいません。言うまでもなく、「骨」は多くの生物の根本を支えるものです。でも、それが人間のための商品になった時、邪魔なものとして排除される理由は、食べにくいから。一首のポイントは「混入事象」です。ここに利便性のみを追求した社会に対するアイロニーが感じられます。

死してなお励めとばかりに墓前に供えられたる栄養ドリンク 両角博守

私の排泄物が私より遠くへ旅をする新幹線 奥村知世

奇数本入りのバックが並んでる鳥手羽先の奇数奇数奇数 田中有芽子

いずれの歌においても、極端に高度化した社会の異形性に焦点が当てられていることがわかります。効率や機能を追い求めた結果、何かが置き去りにされている。このような社会においては、赤ちゃん、高齢者、外国人、病人、被災者といった社会的な弱者が足手まといと見なされるリスクが高まります。その一方で、短歌のような詩の内部では価値の逆転が起こって、マイノリティの視点こそが新しい世界を開く鍵になります。

不審者に「へんなひとですか？」と訊いてしまえる甥の夏がまぶしい

はらじゆくのじゆく
「やさしい鮫」と「こわい鮫」とに区別して子の言うやさしい鮫とはイルカ 松村正直

冷蔵庫開けて食べ物探すときその目をだれにも見られたくない 平岡あみ

問十二、夜空の青を微分せよ。街の明りは無視してもよい 川北天華

くちづけをしてくる者あらば待つ二宮冬鳥七十七歳 二宮冬鳥

「春ぼつくなりました」という姑娘の二ホンゴメール繰り返し読む 西口ひろ子

これらの歌では、子ども、思春期の少女、高齢者、外国人の言葉が新鮮な魅力になっています。

● 牧水と啄木

若山牧水と石川啄木、同時代に生きた二人の歌人の歌を比較してみたいと思います。

はたらけど
はたらけど猶わが生活楽にならざり
ちつと手を見る 石川啄木

啄木の代表歌には生活の実感が溢れています。現代の私たちも一読で共感できる内容だと思います。

白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ 若山牧水

一方、牧水の「白鳥は哀しからずや」という表現には「何故？」という驚きがあります。「空の青海のあをにも染まらずただよふ」に至って初めて心を動かされるようなロマンティックな魅力を感じます。

つくづくと手をながめつつ

おもひ出でぬ

キスが上手の女なりしが

石川啄木

やや長きキスを交して別れ来し

深夜の街の

遠き火事かな

石川啄木

啄木の「キス」の歌はどこかクールというか、相手や出来事に対する心の距離が感じられます。「ちつと手を見る」と同じように、ここでも手を眺めているのが面白い。

ああ接吻海そのままに日は行かず鳥翔ひながら死せ果てよいま

若山牧水

くちづけは永かりしかなあめつちにかへり来てまた黒髪を見る

若山牧水

牧水の「接吻」の歌は、今という一瞬を永遠に変えてしまうような陶酔感に充ちています。自分たちと「あめつち」のすべてが一体化してしまうような世界です。

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ

花を買ひ来て

妻としたしむ

石川啄木

打明けて語りて

何か損をせしごとく思ひて

友とわかれぬ

石川啄木

啄木の「友」の歌には、「キス」の時と同様にやはり心の距離が感じられます。「したしむ」と云いつつ「妻」への愛情も感じられません。心の中はいつも自分のことだけで一杯、そんな惨めさを隠さないところに裏返し**の強さがあるのかもしれない**。

たはむれのやうに握りし友の手の離しが
たかり友の眼を見る

若山牧水

めぐりあひふと見交して別れけり落葉林
のをとこと男

若山牧水

それに対して、牧水の「友」の歌にはほとんど恋愛かと思うような心の交流が感じられません。これらの歌を愛した塚本邦雄は、牧水のな男同士の友情をさらに発展させて、今でいうところのBL的な世界を作り出しています。

夜の新樹しろがねかの日こゑうるみ貴様
とききにきさまが呼びき

塚本邦雄

「筆者プロフィール」 ほむら ひろし

昭和三十七年北海道札幌市生まれ。上智大学文学部英文科卒業。歌誌「かばん」会員。日経歌壇選者。短歌のほかエッセイ、翻訳、絵本の執筆など幅広い分野で活躍している。歌集に『シンジケート』『ドライブドライブアイズ』『手紙魔法まみ、夏の引越し(ウサギ連れ)』。エッセイに『世界音痴』『君がいない夜のこはん』など。絵本、翻訳本など多数ある。平成二十年、短歌評論集『短歌の友人』で第十九回伊藤整文学賞、『楽しい一日』三十首で第四十四回短歌研究賞、同二十九年エッセイ集『鳥肌が』で第三十三回講談社エッセイ賞、同三十一年、第四歌集『水中翼船炎上中』で第二十三回若山牧水賞をそれぞれ受賞。令和元年十月六日に開催した第六十六回「沼津牧水祭・短歌大会」の講師。



第二十四回若山牧水賞に

松村由利子氏の歌集『光のアラベスク』
黒岩剛仁氏の歌集『野球小僧』

宮崎日日新聞社 提供

第二十四回若山牧水賞は、松村由利子氏の歌集『光のアラベスク』と黒岩剛仁氏の歌集『野球小僧』に決まった。二名の受賞は、九年ぶりの四回目となる。授賞式は令和二年二月十二日（水）宮崎市の宮崎観光ホテルで行われた。選考委員は、佐佐木幸綱、高野公彦、栗木京子、伊藤一彦の四氏である。各人の選考理由を要約して紹介する。

根本を考えさせてくれる一冊だ。

伊藤一彦氏は、松村由利子氏について、「あとがきに（この数年間、世界はますます暗みを増したよう）とある。そして（歌の連なりを小さな祈りに見立てた」と。こういった考えを作品にするのは、理屈っぽくなりうまくいかないのだが、鋭い知性と感性をミックスさせて成り立たせている。

高野公彦氏は、松村由利子氏の選考理由について、「おのずから社会に対する観察が行き届いている印象だ。プラスチックが環境を汚染していることやマイナンの心への痛みの歌などがある。さらに、人間の社会や文化が歩む方向への危惧がある。世界的規模で長い歴史を見つめる関心の広さがある。そして、減びてしまう人間くさいものや文化を大事にしようという心が感じられる。人はどう生きるか、

歌集全体に世界や歴史を見つめる幅広い視野が表れている。文明批評的な作品がするどい」。

佐佐木幸綱氏は、黒岩剛仁氏について、「野球と酒が好き、仕事に励み、家族を大事にする。真つすぐに生きる日常を素朴に表現した短歌は単純明快で面白い。人と人との関わり合いをきめ細やかに歌い、作品に実現した。技巧派で幅広い視点から詠んだ歌が特徴的な松村氏とは、同世代だが作風は全然違う。素朴で人間味の濃い歌が魅力だ」。

栗木京子氏は、黒岩剛仁氏について、「読んでいるとどこか心が温かくなり、励まされるような人間味があふれている。それは牧水短歌とも重なり、本来こうあるべき短歌の魅力が表れている。職場の人間関係や大好きな酒、野球など身近なテーマを臨場感をもって詠んでいる」。

受賞に際して、松村氏は「大きな賞に重みを感じている。牧水の伸びやかな韻律と鮮やかな歌を、目指すべき高みとして励んでいく」。黒岩氏は「働いてきた証しとして出した歌集が評価され、率直にうれしい。短歌に携わっていきたくて強く思う」とそれぞれ述べた。

なお、同日、選考委員の佐佐木幸綱氏による「啄木の発明」と題した記念講演が行われた。翌二月十三日（木）には、延岡市の「カルチャープラザのべおか」で、松村由利子氏の「牧水の科学する心」と黒岩剛仁氏の「牧水と啄木」と題した受賞記念講演会が催された。

松村由利子氏は、昭和三十五年福岡県生れ。西南学院大学文学部卒。同大学院中退。朝日新聞と毎日新聞に勤めた後、フリーランスとなる。同二十二年から沖縄県石垣島へ移住。平成二年短歌結社「かりん」入会、現在同人。平成六年「白木蓮の卵」三十首で第三十七回短歌研究新人賞、同十八年、第二歌集『鳥女』で第七回現代短歌新人賞、同二十一年「遠き鯨影」三十首で第四十五回短歌研究賞、同年『与謝野晶子』で第五回平塚らいてう賞、同二十二年「31文字のなかの科学」で科学ジャーナリスト賞、同二十三年、第三歌集『大女伝説』で第七回葛原妙子賞をそれぞれ受賞している。そのほかの歌集に『薄荷色の朝に』『耳ふたひら』。エッセイや児童書の翻訳も手掛けている。歌集『光のアラベスク』から自選の十五首を紹介する。

てのひらに森を包めば幾千の鳥飛び立ちてわが頬を打つ
 まれまれに真すぐなる美も在るこの世モ一ツアルト弾く午後は明るし
 パンのみにて生くる悲しみくらぐらとパン屋の一ダースは十三個
 甘やかに雨がわたしを濡らすとき森のどこかで鹿が目覚める
 地球脱出したしと思う夕まぐれイワトビペンギンの冠羽輝く
 ダーウィンの深き畏れは『種の起源』著すまで
 の二十三年

一年の半分以上が夏の島「全国」という国は遠かり
 ジョパンニが活字を拾っていた時代本はみつしり重たかったよ
 地に落ちたマンゴー子らと拾いおり誰かの余生みたいな夕べ
 やわらかな響きよろしきニホニウム勇み立つとき「ニッポン」現る
 全粒粉のパンみしみしと噛んでおりメルケルは理論物理を学びき
 人類の偉業ほきほき折れやすくバスタで作る建築見本
 わたしは木あなたは鳥と思うとき抱くことのない鳥のたましい
 草原に置かれた銀の匙ひとつ雨を待ちつつ全天映す
 ピアノ弾く無心に空は澄みわたり十指の記憶するアラベスク

黒岩剛仁氏は、昭和三十四年大阪府生れ。早稲田大学第一文学部卒。昭和五十五年に歌誌「心の花」に入会、現在同誌選者。同五十八年に電通に入社。平成十四年第一歌集『天機』を発表、同十八年に第二歌集『トリアージ』を発表。今回受賞した『野球小僧』は十三年ぶりに発表した第三歌集となる。
 歌集『野球小僧』から自選の十五首を紹介する。
 四〇〇km先の母からの電話に「何か用？」そこが被災地であるとも知らず

新局長赴任して来る前日はパソコン画面に顔を呼び出す
 七歳の双子の甥との野球盤気づかれぬよう負けるのも技
 昔ホームラン王たりし人面瘦せて帽子の大き目立つベンチに
 十月の十日は平日仕事あり体育の日たりし面影もなく
 イチローの苦しむ様もまたよきか命取らるることのなければ
 生涯初のカーブを父に投げ込みし野球場には芝生なかりき
 後任は一歳下の先輩社員微妙な敬語を互に使用かたみして
 見上ぐれば高速道路背後には我が社のビルが塙かたみにいたり
 朝起きの苦手な部長で我が付けたる（半休ブレイブス）の渾名懐かし
 スマホなき一週間の疎外感（へいじめ）受けたる中学生に似て

家系図の終点として吾はおり今年も咲けるソメイヨシノは
 生ビール焼酎ロックを二杯ずつさらに日本酒は鯨飲なるや
 悔いるべきはただ一つのみ子なきこと酒酌み交わす息子ありせば
 わが人生の昭和と平成比べつつ昭和の重さいかんともし難き

第三十回 中学生短歌コンクール

第三十回中学生短歌コンクールに沼津市内十九校から一五五七首の応募があり、入選歌五十三首の内、次の十首が特選に選ばれ、令和元年十月二十日の沼津牧水祭・碑前祭において表彰式が行われた。新しい年号初の記念すべき受賞となった。寸評を添えて紹介する。

はばとびの砂場の向こうにそびえたつ富士に向かつて大きく地を蹴る

金盛悠宇和 (第四中)

広い大きな場面と作者の意気込みがそのまま臨場感として見事に伝わってくる。おそろくいい記録が出たに違いないと想像をかき立てる力作。林道で鳥のさえずり聞きながら蝶を探してひ

たすら歩く 高島七響 (第五中)

林道を歩きながら今日の目的は蝶を探すこと。でも鳥が楽しそうにさえずっている、と耳を傾ける。早く蝶が現われないかなあ、という必死な気が良くわかる作品。

水槽で人知れずゆるるみずクラゲさみしさもまた美しくある 黒崎勇和 (暁秀中)

水槽のみずクラゲの動きに美しさとさびしさとを見た作者の深いまなざしに感動させられた。

雨の日にできる水たまりに石投げて広がる波紋を見るのが好きだ 曾我晴花 (大岡中)

自分が投げた先にひろがる世界というものを感じているのであろう。夢のような期待感がいい。

夕暮れにご近所さんが持つてくるキラキラ輝くおいしい野菜 安藤潤 (大平中)

今回がはじめてではない頂きものの野菜。キラキラ輝くに新鮮さと共に感謝の思いが盛られて。

大仏様たくさんの人を見下ろして一体何を思っているのか 吉村結 (第五中)

たくさんの中のひとりととして大仏様に見下ろされている作者。仏様はその一人ひとりへ幸いを！かも知れない。

面談中直視できない母の顔般若の顔か仏の顔か

杉澤杏 (原中)

受験前の三者面談か。お母さんが何を言い出すか冷や冷や。心理描写の効いた作品。「おねがい変なこと言わないで！」と祈る思いを一気に詠み切っている手法も仲々のものと思う。

イルカショーお客の期待を背負いつつ三日月の体が光る 横山すばる (暁秀中)

宙に浮かぶイルカにお客さんたちは期待するわけで、それを知っているのかイルカは必死で演技する。成功した姿は三日月形となる。光さえ放つのだ。結句は作者のイルカへの称賛であろう。

五月雨の晴れわたる日の蜘蛛の巣は水晶のようには輝いていた 川田桃子 (第四中)

雨後の日射しは強い。仕上がったばかりの蜘蛛の巣は殊更光りを放つ。水晶のようなどという喩は言い得て妙であった。光景が目に見える作品。

おばあちゃんに見守られていた小さなわたしだからわたしが今度は見守る 大橋友聖 (第五中)

わたしが今度は見守るという結句のフレーズに目頭をあつくさせられた。この決意にも似たひびきは冬の陽ざしのようにやわらかくあたたかく注がれた。そしてこの祖母と孫の有りようが、すべての人の上に欲しいと思ったことであった。

この短歌コンクールを機に、これからも詠み続けて行かれることを心からお願いしたい。

選は沼津牧水会理事の永久保英敏、河本尚子、青木朝子の三名が担当した。(青木朝子)



第 66 回沼津牧水祭・碑前祭での表彰式
令和元年 10 月 20 日 (日)